

## 有限会社丸越商事

取材：2022年5月

# 荒地を耕して種を蒔き育てて収穫へ そんなイメージの知財が世界を変える

浅草で三代続く履物専門店を営みながら、靴と和装履物の両方の知識と技術を融合させた新たな製品を生み出している。「地球履優(ちきゅうりゆう)」というブランドのサンダルは人に優しい履き心地とともに、総重量の約8割に土に還る素材を利用し革はエコレザーにこだわった、サステナブルで地球環境にも優しい逸品。「ジャパンレザアワード2021」で特選を受賞している。

### 主な権利

2022年：特許 第7057484号  
2021年：意匠登録 第1694387号  
2021年：意匠登録 第1694388号  
2021年：商標登録 第6396660号  
2021年：商標登録 第6450793号

### 会社概要

所在地：東京都台東区千束 3-9-10  
電話：090-5829-1830  
URL：https://earth-friendly-sandals.co.jp  
業種：和装履物・サンダルの製造販売  
設立：1972年(昭和47年)  
資本金：300万円



代表取締役：佐藤 克己さん

## 鼻緒が痛いという難点を改良すべく工夫を重ねる

「国産下駄の在庫を置いてもらえませんか」との相談がきっかけで、和装履物の販売に切り替えてから20年になる丸越商事。それまでは靴の小売販売を行っていたが、中国からの安価な商品が主流になり、価格競争が厳しくなっていた。当時はまた、東南アジアや中国からの観光客が増え始めた頃である。「靴よりも値段の高い下駄に強く興味を持つ姿を見て、これからは日本伝統の履物を海外の人たちへ売ろうと決意しました」と語る佐藤社長。インバウンド需要を取り込み、売上も順調に推移するかと思われたが、販売機会を失うケースも多かったという。

その大きな要因は、鼻緒が足の指の挟む部分に食い込んで痛いということ。しかも足を入れた瞬間で拒否する人がほとんどだった。そこから、誰が履いても痛くない鼻緒を作るための長きにわたる改良が始まる。太さを変え、素材を変えて、改善策をずっと考え続ける毎日だった。

## コロナ禍で生まれた時間を知財への取り組みに充てる

そしてとうとう17年目、これなら痛くないという構造を思い付いた。さらに期を同じくして、取引先の金融機関から知財センターのことを紹介され、自転車で秋葉原のセンターを訪ねた。新型コロナウイルス感染症が日本で初めて確認された2020年1月のことだった。「紹介していただいたので、とりあえず伺っただけなんです。当時は知財のことも何も知りませんでした」と佐藤社長。

「知財センターのアドバイザーに、こちらが今考えているアイデアをざっくばらんにお話ししました。その時は本当に発想だけで、何の形もなかったんです。すると、それは面白いから形にしたら権利化できるかもしれないと言われました。間もなくコロナ禍でインバウンド需要が急に冷え込み、店への客足も遠のきました。このままじっとしていてもしょうがないので、いつかコロナ禍が終わる時のために、知財に取り組んでみようと考え

ました」幸か不幸か、コロナ禍で時間ができ、知財に集中できたという佐藤社長。アドバイザーとのやり取りで、知財に対する理解が少しずつ深まっていった。

## 人や環境への優しさとともに前へ出ることを後押ししたい

「知財をまったく知らなかった私には、まず文章が難しかったですね。小説や新聞とはまた違った言い回しで、考えていることを文字に置き換えるのが難しく、とても苦労しました」と語る佐藤社長。しかし勉強の甲斐もあり、複数の意匠や商標を登録できた。中でも「地球履優」という新しいエコブランドには、佐藤社長の強い想いが込められている。「この『地球に優しい履物』という名前のように、地球環境に配慮したモノづくりを追求する中で、結果として知財を獲得できればと思います。世の中がコロナ禍で止まって気が付いたことは、前へ出たくても出られない人がたくさんいるということ。それは、活躍する場面が失われてしま

皮革、クッション材、ゴム底などのすべての素材にこだわった、地球にも人にも優しいエコなサンダル「地球履優」。



オリジナルの下駄、雪駄、草履、サンダルなどを製造販売。厳選した素材と、老舗専門店ならではの熟練の職人技が光る。



色や柄、デザインにも優れた製品は履き心地もよく、多くの人々に支持されている。

地球履優  
https://earth-friendly-sandals.co.jp

「地球履優」のブランドで商標を登録。誰もが気軽に履けるサンダルを通して、地球環境を保護するサステナブルな活動の一環にふれることができる。

ことです。履物づくりを通して、微力ですが、場面をつくる取り組みを行いたい。環境への優しさ、人に対する優しさの視点を持ち、お互いを尊重し敬意を持ちながら、みんなが幸せや豊かさを持つことに積極的に関わりたいと思っています」

## 特許を取得したことによりビジネスの状況が一変した

特許出願では、拒絶理由通知が3回届いた。「特許庁の審査官に電話して拒絶理由を聞いている間、一生懸命メモを取り、知財センターのアドバイザーに伝えました。そして、アドバイザーや弁理士の先生の助言により、無事に特許を取得できました。こちらの話をよく聞いて、的確に丁寧に分かりやすく対応していただいたことに感謝しています」と佐藤社長。鼻緒の新たな発明において特許を取得したのは、2022年4月のことだった。

佐藤社長は「知財権を持つことで、オリジナル商品であることが明確になり、製品に強く自信を持てるようになりました

た。特に特許の取得後は引き合いが格段に増え、大きな展示会への出展がかなうなど、ビジネスのさまざまな状況が劇的に変わりましたね。当初私は意匠だけで十分だと思っていましたが、特許の力は絶大でした。今後は権利を活かしてじっくりと良い品物づくりに励み、さらにお客様に喜ばれる製品をお届けしたいです。日本の伝統履物の技術を活かし、海外への販路拡大を目指します」と前を向いた。

## 何よりも大きいのは人との巡り合わせだと感じる

「知財に関しては、土地を開墾してきたイメージがあります。荒地を耕すところから始めて、畑に種を蒔いて育て、今後の収穫にまで至りそうです。そして何

よりも大きいのは、人との巡り合わせ、人とのつながりです」と強調する佐藤社長。「最初は知財についての意識もなかった私に、知財センターのアドバイザーは一生懸命に説明してくれて、根気強くお付き合いしてもらいました。また、材料を提供してくれる会社や職人さんに、こちらが知財に取り組んでいるコンセプトが面白いと共感していただき、つながりが生まれたこともあります。私にしてみれば、知財との出会いは、数奇な巡り合わせ。何もなかったところからのスタートでしたから、0が100になったような感覚ですね。知財という新たな価値を得て、すべてが大きく変わりました。世の中が変わるほどすごいと感じています。今後は知財で得た力を使い、もっと多くの人々に喜ばれるものを広めていきたいです」

知財  
センター  
から

### 文化や伝統のために知財を活かしたいという想い

特許においては粘り強く対応し、権利化できました。日本の文化や伝統を伝えるには、職人と手を携えてお客様に良い品を提供することが不可欠であり、職人の生活を守るためには継続した売上が必要。そのために知財を活用したいという社長の強い想いがあり、一連のサポートによって成果を挙げる事ができたと感じます。担当：山下アドバイザー